

『学び合い』における授業規律定着の事例的研究

○渡部 智華(上越教育大学教職大学院)

西川 純(上越教育大学教職大学院)

(j285651e@myjuen.jp)

要約

本研究では、一斉指導型授業で進められる授業と『学び合い』で行われる授業とを授業規律の定着という観点から比較した。この結果、一斉指導型で進められる授業での授業規律を逸脱していた子どもたちの言動が、『学び合い』での授業では回を追うごとに安定し、児童たちが学習に向かうようになることが明らかとなった。授業者自身もクラスの様子の変化や、児童の様子の変化を実感しており、授業規律逸脱のあるクラスにおいて定期的に『学び合い』を取り入れていくことの有用性が検証された。

キーワード： 授業規律 『学び合い』 学級の荒れ

I 問題の所在

国立教育政策研究所(2005)は、1998年前後から、小学校において授業中の私語、学習意欲の低下、さらに教師への反抗など、授業が成立しがたい状況が現れ、「学級がうまく機能しない状況」が一部で見られるようになった¹⁾と述べている。国立教育研究所(1999)は「学級がうまく機能しない状況」は『子どもたちが教室内で勝手な行動をして教師の指導に従わず、授業が成立しないなど、集団教育という学校の機能が成立しない学級の状態が一定期間継続し、学級担任による通常的手法では問題解決ができない状態に立ち至っている場合』を指すとしている²⁾。また四辻(2011)は、近年、小学校において「学級崩壊」と呼ばれる現象が広がり、安定的な学習環境を確保することが困難になってきていると指摘しており³⁾、浦野(2001)は小学校において、児童が教師の指導に反発し学級経営や授業が成り立たなくなるような「学級の荒れ」(もしくは「学級崩壊」)と呼ばれる現象が増加傾向にあるとしている⁴⁾。河村(1999)は、「学級崩壊」を教師が学級集団を単位として授業や活動を展開することが不可能になった状態、集団の秩序を喪失した状態と定義している。例えば、子どもたちの私語で授業が展開できない、教師の指示や説明を無視して勝手なことをやっている⁵⁾等の授業規律を逸脱した状態である。

浦野(2001)は、学級の荒れを改善するための介入

は、教師へのコンサルテーションとTTによる支援を中心に行った。教師の子ども認知や子供の教師認知に関するアセスメントを行った後、コンサルテーションでは、教師の子ども認知や子どもとの対応の在り方の変容をめざした話し合いが繰り返された。TTによる支援では、学級に入り込んだ指導補助者が荒れの中心メンバーを中心に関わりを深め、学習活動を支えることによって彼らの授業への参加意欲を高めたり、教師との関係を再構築できるようなはたらきかけを行った。その結果、TTによる支援をフェードアウトした後も介入前のような荒れた状態は消失した⁶⁾、という研究をまとめている。しかし、その一方で自らも学級を担任する教師がコンサルタントとTTの役割を同時に果たすことは、実際の学校現場では、実現しにくいという問題がある⁷⁾ことを指摘している。

『学び合い』の授業を通して学習者自身が逸脱を抑制するという報告がある。『学び合い』とは西川(2004)の提唱する学習者の有能性を基にした学習である。大平(2007)は、『学び合い』による授業を通じた学習者による逸脱を抑制する環境づくりに着目した研究において、大半の学習者が真剣に学習に取り組むとともに、相対的に安定して取り組める一部の学習者が方向修正を促す役割を担うようになり、逸脱抑制する環境が作られることが明らかになったとしている⁸⁾。

しかし、一斉指導型授業で逸脱行為のある学級を

対象とした研究は、管見の限り見当たらない。

業を取り入れた際の意識の変容について検証する。

II 研究目的

本研究では、一斉指導型授業で進められる授業と『学び合い』による授業とを比較し、一斉指導型で進められる授業での授業規律を逸脱する言動が、学習のすべてを学習者に任せた『学び合い』による授業において授業規律の定着を図ることに効果があることを明らかにすることが目的である。

III 研究方法

1. 調査対象

N県J公立小学校1年生

児童数:20名(男子11名,女子9名)

単元:繰り上がりのある加法・繰り下がりのある減法

2. 調査期間

平成28年11月～12月

3. 調査内容

- (1)ビデオカメラを教室の前方と後方の計2ヶ所に設置し、授業の様子を記録する。
- (2)『学び合い』での授業において、授業者及び児童にICレコーダーをつけ、会話を記録する。
- (3)単元末に授業者にインタビューを、児童にインタビュー及びアンケート調査を実施する。

4. 分析方法

- (1)一斉指導型授業中における無関係な立ち歩きや私語が、『学び合い』での授業においては、授業内容に関係のある言動に変容した様子を児童の行動からを検証する。
- (2)児童の音声から、一斉指導型授業における授業内容とは関係のない発話が『学び合い』での授業では授業に関連する発話に変化したことを検証する。
- (3)単元末に授業者にインタビューを行い、『学び合い』での授業において児童達の様子に変化がみられたか、また児童の学習に向かう様子に変化が見られたかを検証する。児童へのインタビュー及びアンケートでは、『学び合い』での授

IV 結果と考察

一斉指導型授業と『学び合い』による授業の様子を比較すると、『学び合い』による授業ではクラス全体の授業規律の定着がみられ、児童の学習に対する意欲の向上が明らかとなった。

※詳細については、当日発表する。

V 引用参考・文献

- 1) 国立教育政策研究所:『学級運営等の在り方についての調査研究』報告書, 2005.
- 2) 学級経営研究会:『学校経営をめぐる問題の現状とその対応—関係者間の信頼と連携による魅力ある学級づくり—』(中間まとめ), 1999.
- 3) 四辻伸伍:「事例に学ぶ チーム援助を活かした対応 授業が成立しにくい学級における取り組み」, 児童心理, 5(3), pp.117-121, 金子書房, 2011.
- 4) 浦野裕司:「学級の荒れへの支援の在り方に関する事例研究—TTによる指導体制とコンサルテーションによる教師と子どものこじれた関係の改善—」, 教育心理学研究, 49(1), pp.112-122, 日本教育心理学会, 2001.
- 5) 河村茂雄:学級崩壊に学ぶ—崩壊のメカニズムを絶つ教師の知識と技術—, p.1, 誠信書房, 1999.
- 6) 前掲書 4)
- 7) 前掲書 4)
- 8) 大平正芳:『学び合い』の形成過程に関する研究—学習者による逸脱を抑制する環境作りに着目して—, 上越教育大学大学院修士論文(未公判), 2007.